

一般国道9号（中山名和道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡大山町

SHIMO ICHI TSUKI JI NO MINE HIGASHI DOORI
下市築地ノ峯東通第2遺跡
(本 文 編)

2013

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



須恵器窯と製鉄炉(北東から)



窯 2 新段階完掘状況 (東から)



製鉄炉炉底塊出土状況(南から)



窯2出土須恵器・瓦

序

鳥取県埋蔵文化財センターは、一般国道9号中山名和道路の改築に伴う発掘調査を、平成21年度から実施し、平成23年度末時点で10遺跡、調査面積は延べ5万1千平方メートル以上に及んでいます。

本書に掲載した大山町に所在する下市築地ノ峯東通第2遺跡では、縄文時代の石器製作址、平安時代の須恵器窯3基や製鉄炉1基、炭焼窯など生産遺構を多数確認するに至りました。とりわけ、平安時代の須恵器窯や製鉄炉からは多量の須恵器、古瓦、製鉄関連遺物が出土しており、古代における物資の生産や流通を解明するうえで、また、この地域の歴史を解明するための重要な資料であると考えます。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

下市築地ノ峯東通第2遺跡では、現地説明会を開催し、県内外から多くの方々に御参加いただき、その素晴らしさを実感していただきました。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成25年 3月

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は山陰地方を東西に結ぶ主要幹線道路であり、広域交通はもとより、観光交通、生活交通など、多様な交通を担う重要な路線です。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、鳥取市青谷町から米子市(鳥取島根県境)までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

中山名和道路は、西伯郡大山町八重から同町下市にかけての多種多様な交通による交通混雑の緩和、安全・円滑な交通の確保のほか、災害時の緊急輸送路の代替路線としての機能分担などを目的とし、さらに、山陰の地方都市間の連携を強化するとともに、環日本海交流の基幹軸の一翼を担う高規格幹線道路(自動車専用道路)として整備を行っています。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成22年度は「下市築地ノ峯東通第3遺跡」、「下市築地ノ峯東通第2遺跡」、「殿河内定屋ノ前遺跡」の3遺跡の本調査について、鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査を行いました。

本書は、上記の「下市築地ノ峯東通第2遺跡」の調査結果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成25年 3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所

所長 角田 文敏

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号(中山名和道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成22年度に行った^{しもいち}下市^{つきじ の みねひがしどおり}築地ノ峯東通第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
下市築地ノ峯東通第2遺跡：西伯郡大山町大字下市字築地ノ峯ほか 調査面積：7,566㎡
3. 本報告書の執筆は、森本倫弘、北浩明、濱本利幸、長尾かおり、坂本嘉和(以下、「調査担当職員」、門脇隆志、中村茂央が分担して行い、編集は濱本・坂本が行った。執筆者名は、目次に記した。
4. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センターが行った。
5. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
6. 発掘調査によって作成された図面や写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本報告書で示す標高は、国土交通省3級基準点H19-3-10を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。磁北は、座標北に対し、7°38′西偏する。なお、X：とY：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
8. 遺構や遺物を評価するにあたり、下記の方々に御指導いただいた(敬称略、所属は当時)。また、木立雅朗氏には須恵器窯の帯磁率測定をしていただき、玉稿を賜った。記して深謝いたします。
須恵器窯の調査方法：丹羽野裕(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
須恵器窯の焼成技術及び構造に関する調査・帯磁率測定：木立雅朗(立命館大学教授)
製鉄炉の調査方法及び製鉄関連遺物の分類整理：穴澤義功(たたら研究会委員)
地質に関する指導及び窯壁等の石材鑑定：赤木三郎(鳥取大学名誉教授)
須恵器・瓦胎土分析の試料選定及び試料採取方法に関する指導：白石純(岡山理科大学准教授)
9. 本報告書に掲載した地形図には、下記の地図を使用した。
「大山町地形図」「都市計画図」大山町作成、「1/25,000 地形図『御来屋』『赤碕』『淀江』『船上山』『伯耆浦安』」国土地理院発行
10. 本報告にあたり、以下の業務を業者委託した。
航空写真撮影：調査前航空写真撮影、第1遺構面調査後航空写真撮影
測量：現地における基準点測量・方眼測量、調査前後地形測量、第1遺構面の地形測量、遺構の三次元測量
自然科学分析：残留磁化測定による年代測定、製鉄関連遺物の金属学的分析、出土石器の石材産地同定、出土炭化材の年代測定、出土炭化材の樹種同定、花粉化石分析、植物珪酸体分析
11. 須恵器と瓦の胎土分析については白石純氏(岡山理科大学准教授)に委託した。
12. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に御助言や御支援、御協力をいただいた。記して深謝いたします(敬称略、五十音順)。
上原真人、菱田哲郎、山陰古瓦研究会、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター、大山町教育委員会、米子市教育委員会、米子市埋蔵文化財センター

凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には以下の略語を用い、併せて「遺構名・遺物番号・日付」を記入した。
下市築地ノ峯東通第2遺跡：ツキシ2
2. 一部の遺構については本報告書における遺構番号(新)を発掘調査時のもの(旧)から変更している。新旧の遺構名・番号の対応は下記の遺構名新旧対照表(表1)で示すとおりである。
4. 本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。
遺構図 須恵器窯跡：1/30・1/40、製鉄関連遺構：1/20、1/60、土坑：1/40、炭焼窯：1/40
遺物実測図 土器：1/4・1/6、瓦：1/4・1/5、石器：2/3・1/4・1/6、
製鉄関連遺物：1/4・1/6・1/10
5. 本書における土器・土層の色調及び一部の土層の土性区分には『新版 標準土色帖』を用いた。
6. 本書における遺物番号は下記のとおり表記し、種類毎に連番を付している。

土器・瓦：普通数字、製鉄関連遺物：丸囲み数字、石器：S

7. 遺構図・遺物実測図に用いたトーンは基本的に各図に凡例を示しており、特に説明がない場合は以下のとおりである。

遺構図 ：地山 ：石

8. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺物実測図中における記号は以下のとおりである。

→：ケズリの方向(砂粒の動き) ←→：石器の使用痕範囲 —：石器の側縁の潰れ範囲

9. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

10. 本報告書における遺構や遺物の時期決定については下記の文献を参照した。

縄文土器：井上智博 1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

弥生土器：清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社

土器：牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

須恵器：岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

丹羽野裕 2005「出雲における9～10世紀の須恵器の様相—窯跡とその出土資料を中心に—」『平安時代前期の土器様相—中国地方を中心に—』山陰中世土器検討会

表1 遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
テラス1	SS1	炭焼窯5	SK16	炭焼窯14	SK19	炭焼窯23	SK1
流出溝1	SS1-SD3	炭焼窯6	SK26	炭焼窯15	SK7	溝状遺構1	SD2
流出溝2-a	SS1-IHSD2	炭焼窯7	SK25	炭焼窯16	SK2	溝状遺構2	SD1
流出溝2-b	SS1-SD2	炭焼窯8	SK20	炭焼窯17	SK27	土坑1	SK29
流出溝2-c	SS1-SD1	炭焼窯9	SK21	炭焼窯18	SK5	土坑2	SK32
炭焼窯1	SK3	炭焼窯10	SK24	炭焼窯19	SK28	土坑3	SK33
炭焼窯2	SK23	炭焼窯11	SK9	炭焼窯20	SK6	瓦溜まり1	SK8
炭焼窯3	SK11	炭焼窯12	SK14	炭焼窯21	SK15	瓦溜まり2	SK13
炭焼窯4	SK12	炭焼窯13	SK17	炭焼窯22	SK18		

目 次

(本文編)

巻頭カラー写真図版

序

序文

例言

凡例

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯…………… (森本) 1

第2節 発掘調査の経過と方法…………… (森本・北) 1

第3節 遺物整理作業の経過と方法…………… (北・坂本) 3

第4節 調査体制…………… (森本) 6

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… (中村) 7

第2節 歴史的環境…………… (中村) 7

第3節 既往調査の成果…………… (森本) 13

第3章 遺跡の立地と層序

第1節 遺跡の立地…………… (北) 15

第2節 調査地内の堆積…………… (北) 15

第4章 古墳時代以前の調査

第1節 調査の概要…………… (北) 27

第2節 土坑…………… (門脇・濱本) 27

第3節 自然流路…………… (門脇・濱本) 28

第4節 縄文土器…………… (長尾) 32

第5節 石器…………… (長尾・北) 40

第6節 弥生土器・土師器…………… (長尾) 84

第5章 古代以降の調査

第1節 調査の概要…………… (北) 99

第2節 須恵器窯関連遺構群…………… (北) 104

第3節 製鉄関連遺構…………… (坂本) 209

第4節 製鉄関連遺物…………… (坂本) 223

第5節 自然流路・1区遺構外出土遺物…………… (坂本) 266

第6節 瓦溜まり…………… (長尾) 269

第7節 炭焼窯…………… (長尾・森本・濱本) 284

第8節 2区遺構外出土遺物…………… (坂本) 312

第6章 総括

- 第1節 縄文時代の石器製作形態と空間利用形態…………… (北)355
- 第2節 須恵器の生産形態…………… (北)365
- 第3節 瓦の生産と供給…………… (坂本)393
- 第4節 製鉄炉と鉄生産の様相…………… (坂本)400
- 第5節 伏せ焼きの大型炭焼窯について…………… (長尾)410
- 第6節 平安時代における生産形態と経営主体…………… (坂本)415

(自然科学分析・写真図版編)

第7章 自然科学分析の成果

- 第1節 花粉分析・珪藻分析…………… (株式会社文化財調査コンサルタント)1
- 第2節 黒曜石・安山岩製遺物の原産地分析…………… (有限会社遺物材料研究所)11
- 第3節 残留磁化測定による年代測定…………… (株式会社パレオ・ラボ)34
- 第4節 炭化材の放射性炭素年代測定…………… (株式会社古環境研究所)38
- 第5節 炭化材の樹種同定…………… (株式会社古環境研究所)54
- 第6節 地山粘土・岩石の帯磁率測定結果…………… (立命館大学文学部 木立雅朗)68
- 第7節 須恵器窯出土土器の胎土分析…………… (岡山理科大学生物地球システム学部 白石純)98
- 第8節 製鉄関連遺物分析資料の考古学的観察…………… (穴澤義功・坂本)112
- 第9節 製鉄関連遺物の金属学的調査…………… (株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター)144

写真図版

報告書抄録

巻頭図版目次

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 巻頭図版 1 須恵器窯と製鉄炉(北東から) | 巻頭図版 3 製鉄炉底塊出土状況(南から) |
| 巻頭図版 2 窯2新段階完掘状況(東から) | 巻頭図版 4 窯2出土須恵器・瓦 |

挿図目次

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 第1図 中山名和道路関係遺跡位置図…………… 1 | 第14図 2区東西土層断面図…………… 22 |
| 第2図 調査地位置図…………… 2 | 第15図 2区北壁・南壁土層断面図…………… 23 |
| 第3図 遺跡位置図…………… 7 | 第16図 2区南北土層断面図…………… 24 |
| 第4図 周辺遺跡分布図…………… 8 | 第17図 遺跡周辺の地質…………… 26 |
| 第5図 遺跡周辺の古代遺跡…………… 10 | 第18図 縄文時代の遺構配置図…………… 28 |
| 第6図 下市築地ノ峯東通第2遺跡古墳時代以前遺構配置図…………… 14 | 第19図 土坑1…………… 29 |
| 第7図 下市築地ノ峯東通第2遺跡古代以降遺構配置図…………… 14 | 第20図 土坑1出土土器…………… 29 |
| 第8図 遺跡周辺地形図…………… 16 | 第21図 土坑2…………… 29 |
| 第9図 調査地内基本層序模式図…………… 17 | 第22図 土坑3…………… 29 |
| 第10図 調査前の地形と土層断面位置図…………… 18 | 第23図 縄文流路…………… 30 |
| 第11図 1区平坦部土層断面図…………… 19 | 第24図 自然流路土層断面図…………… 31 |
| 第12図 1区灰原1～自然流路及び排滓場1周辺土層断面図…………… 20 | 第25図 縄文土器(早期末～前期初頭)出土数量分布図(縄文遺構・包含層)…………… 33 |
| 第13図 1区斜面部土層断面図…………… 21 | 第26図 縄文土器(早期末～前期初頭)出土数量分布図(古代以降堆積層)…………… 33 |
| | 第27図 縄文土器(中期以降)出土量分布図(縄文遺 |

	構・包含層) …………… 34	第76図	須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構立面図(2)…………… 103
第28図	縄文土器(中期以降)出土量分布図(古代以降堆積層)…………… 34	第77図	窯1～3土層断面図…………… 105
第29図	自然流路出土縄文土器(早期末～前期初頭)…………… 38	第78図	窯1・2地区割り模式図…………… 107
第30図	遺構外出土縄文土器(早期末～前期初頭)…………… 39	第79図	窯1完掘平面図・短軸土層断面図…………… 116
第31図	遺構外出土縄文土器(後期～晩期)…………… 39	第80図	窯1主軸土層断面図…………… 117
第32図	黒曜石製石器出土数量分布図(縄文遺構・包含層)…………… 44	第81図	窯1古段階遺構図…………… 119
第33図	黒曜石製石器出土数量分布図(古代以降堆積層)…………… 44	第82図	窯1古段階遺物出土状況図(平面分布)…………… 122
第34図	安山岩製石器出土数量分布図(縄文遺構・包含層)…………… 45	第83図	窯1古段階遺物出土状況図(垂直分布)…………… 123
第35図	安山岩製石器出土数量分布図(古代以降堆積層)…………… 45	第84図	窯1古段階出土須恵器(1)…………… 124
第36図	礫石器・頁岩製石器出土位置と数量分布図…………… 46	第85図	窯1古段階出土須恵器(2)・瓦…………… 125
第37図	石鏃形態分類模式図…………… 50	第86図	窯1新段階遺構図…………… 127
第38図	黒曜石製石鏃…………… 51	第87図	窯1新段階遺物出土状況図(平面分布)…………… 130
第39図	黒曜石製石鏃未製品…………… 52	第88図	窯1新段階遺物出土状況図(垂直分布)…………… 131
第40図	黒曜石製スクレイパー(1)…………… 53	第89図	窯1新段階出土須恵器…………… 132
第41図	黒曜石製スクレイパー(2)…………… 54	第90図	窯1新段階出土瓦類…………… 133
第42図	黒曜石製スクレイパー(3)…………… 55	第91図	窯1上層出土須恵器…………… 134
第43図	黒曜石製石錐…………… 56	第92図	窯1上層出土瓦…………… 134
第44図	黒曜石製加工痕のある剥片・使用痕のある剥片…………… 57	第93図	窯2古段階側壁裏込め出土瓦…………… 135
第45図	黒曜石製使用痕のある剥片…………… 58	第94図	窯2完掘平面図・短軸土層断面図…………… 138
第46図	黒曜石製両極剥離痕のある石器(1)…………… 59	第95図	窯2主軸土層断面図…………… 139
第47図	黒曜石製両極剥離痕のある石器(2)…………… 60	第96図	窯2古段階遺構図…………… 141
第48図	黒曜石製両極剥離痕のある石器(3)…………… 61	第97図	窯2古段階遺物出土状況図(平面分布)…………… 144
第49図	黒曜石製石核(1)…………… 62	第98図	窯2古段階遺物出土状況図(垂直分布)…………… 145
第50図	黒曜石製石核(2)…………… 63	第99図	窯2古段階出土須恵器(1)…………… 146
第51図	黒曜石製石核(3)…………… 64	第100図	窯2古段階出土須恵器(2)…………… 147
第52図	黒曜石製石核(4)…………… 65	第101図	窯2古段階出土須恵器(3)…………… 148
第53図	黒曜石製石核(5)…………… 66	第102図	窯2古段階出土瓦(1)…………… 148
第54図	黒曜石製石核(6)…………… 67	第103図	窯2古段階出土瓦(2)…………… 149
第55図	黒曜石製ブランク(1)…………… 68	第104図	窯2古段階出土瓦(3)…………… 150
第56図	黒曜石製ブランク(2)…………… 69	第105図	窯2新段階遺構図…………… 153
第57図	安山岩製石器(1)…………… 71	第106図	窯2新段階遺物出土状況図(平面分布)…………… 156
第58図	安山岩製石器(2)…………… 72	第107図	窯2新段階遺物出土状況図(垂直分布)…………… 157
第59図	安山岩製石器(3)…………… 73	第108図	窯2新段階出土須恵器・製鉄関連遺物…………… 158
第60図	打製石斧・磨製石斧…………… 74	第109図	窯2新段階出土瓦(1)…………… 159
第61図	磨製石斧(1)…………… 75	第110図	窯2新段階出土瓦(2)…………… 160
第62図	磨製石斧(2)…………… 76	第111図	窯2新段階出土瓦(3)…………… 161
第63図	磨製石斧(3)…………… 77	第112図	窯2新段階出土瓦(4)…………… 162
第64図	礫石器(1)…………… 78	第113図	窯2新段階出土瓦(5)…………… 163
第65図	礫石器(2)…………… 79	第114図	窯2新段階出土瓦(6)…………… 164
第66図	礫石器(3)…………… 80	第115図	窯2埋戻し土出土須恵器…………… 165
第67図	礫石器(4)…………… 81	第116図	窯2出土瓦…………… 165
第68図	礫石器(5)…………… 82	第117図	窯3完掘平面図・短軸土層断面図…………… 168
第69図	礫石器(6)…………… 83	第118図	窯3主軸土層断面図…………… 169
第70図	礫石器(7)…………… 84	第119図	窯3第3段階遺物出土状況図(平面分布)…………… 172
第71図	弥生時代後期の土器…………… 85	第120図	窯3第3段階遺物出土状況図(垂直分布)…………… 173
第72図	古墳時代前期の土器…………… 86	第121図	窯3第1・2段階出土須恵器…………… 174
第73図	古代以降の遺構配置…………… 100	第122図	窯3第3段階出土須恵器(1)…………… 175
第74図	須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構の配置…………… 101	第123図	窯3第3段階出土須恵器(2)…………… 176
第75図	須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構立面図(1)…………… 102	第124図	窯3流入土出土須恵器・製鉄関連遺物…………… 176
		第125図	灰原1～3配置図…………… 178
		第126図	灰原1土層断面図…………… 179
		第127図	灰原2・3土層断面図…………… 180
		第128図	灰原出土遺物の分布(全器種)…………… 187
		第129図	灰原出土杯類の分布…………… 187
		第130図	灰原出土壺類の分布…………… 188
		第131図	灰原出土甕の分布…………… 188
		第132図	灰原出土瓦の分布…………… 189
		第133図	灰原1出土須恵器(1)…………… 193

第134図	灰原1出土須恵器(2)	194	第185図	流出溝1出土製鉄関連遺物(1)	246
第135図	灰原1出土須恵器(3)	195	第186図	流出溝1出土製鉄関連遺物(2)	247
第136図	灰原1出土須恵器(4)他	196	第187図	テラス1出土製鉄関連遺物(1)	247
第137図	灰原1出土瓦(1)	197	第188図	テラス1出土製鉄関連遺物(2)	248
第138図	灰原1出土瓦(2)	198	第189図	テラス1出土製鉄関連遺物(3)	249
第139図	灰原1出土瓦(3)	199	第190図	排滓場1出土製鉄関連遺物(1)	249
第140図	灰原2出土須恵器	200	第191図	排滓場1出土製鉄関連遺物(2)	250
第141図	灰原2出土瓦	200	第192図	排滓場1出土製鉄関連遺物(3)	251
第142図	灰原3出土須恵器(1)	201	第193図	排滓場1出土製鉄関連遺物(4)	252
第143図	灰原3出土須恵器(2)	202	第194図	排滓場1出土製鉄関連遺物(5)	253
第144図	灰原3出土瓦(1)	203	第195図	排滓場1出土製鉄関連遺物(6)	254
第145図	灰原3出土瓦(2)	204	第196図	排滓場2出土製鉄関連遺物(1)	255
第146図	灰原3出土製鉄関連遺物	204	第197図	排滓場2出土製鉄関連遺物(2)	256
第147図	灰原出土須恵器遺構間接合資料(1)	205	第198図	排滓場2出土製鉄関連遺物(3)	257
第148図	灰原出土須恵器遺構間接合資料(2)	206	第199図	排滓場2出土製鉄関連遺物(4)	258
第149図	灰原関連須恵器	207	第200図	排滓場2出土製鉄関連遺物(5)	259
第150図	道1・2出土須恵器・瓦	208	第201図	排滓場2出土製鉄関連遺物(6)	260
第151図	製鉄場遺構配置図	209	第202図	排滓場2出土製鉄関連遺物(7)	261
第152図	テラス1変遷図	210	第203図	排滓場2出土製鉄関連遺物(8)	262
第153図	製鉄炉地下構造・古段階	211	第204図	表土出土製鉄関連遺物(1)	262
第154図	テラス1製鉄炉	212	第205図	表土出土製鉄関連遺物(2)	263
第155図	テラス1製鉄炉(廃絶時)	213	第206図	表土出土製鉄関連遺物(3)	264
第156図	製鉄炉炉底塊出土状況図	214	第207図	表土出土製鉄関連遺物(4)	265
第157図	製鉄炉炉壁出土状況図	215	第208図	製鉄関連遺物部位名称凡例	265
第158図	テラス1出土須恵器・土師器	216	第209図	古代流路出土須恵器	266
第159図	製鉄炉流出溝2変遷図	217	第210図	1区遺構外出土須恵器・土師器	266
第160図	排滓場1・2土層断面図	218	第211図	1区遺構外出土瓦(1)	267
第161図	排滓場1出土須恵器・瓦	219	第212図	1区遺構外出土瓦(2)	268
第162図	排滓場2出土須恵器	220	第213図	瓦溜まり1	269
第163図	排滓場2出土瓦	221	第214図	瓦溜まり1出土瓦(1)	270
第164図	下市築地ノ峯東通第2遺跡における製鉄関連遺物の分類整理	223	第215図	瓦溜まり1出土瓦(2)	271
第165図	製鉄関連遺物構成比・重量比	225	第216図	瓦溜まり1出土瓦(3)	272
第166図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(1)	230	第217図	瓦溜まり1出土瓦(4)	273
第167図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(2)	231	第218図	瓦溜まり1出土瓦(5)	274
第168図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(3)	232	第219図	瓦溜まり2	274
第169図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(4)	233	第220図	瓦溜まり2出土瓦	275
第170図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(5)	234	第221図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(1)	276
第171図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(6)	235	第222図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(2)	277
第172図	下市築地ノ峯東通第2遺跡 製鉄関連遺物構成図(7)	236	第223図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(3)	278
第173図	テラス1製鉄炉出土製鉄関連遺物(1)	237	第224図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(4)	279
第174図	テラス1製鉄炉出土製鉄関連遺物(2)	238	第225図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(5)	280
第175図	テラス1製鉄炉出土製鉄関連遺物(3)	239	第226図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(6)	281
第176図	テラス1製鉄炉出土製鉄関連遺物(4)	241	第227図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(7)	282
第177図	流出溝2-c出土製鉄関連遺物(1)	241	第228図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(8)	283
第178図	流出溝2-c出土製鉄関連遺物(2)	242	第229図	瓦溜まり1周辺II層出土瓦(9)	283
第179図	流出溝2-b出土製鉄関連遺物(1)	242	第230図	炭焼窯1	285
第180図	流出溝2-b出土製鉄関連遺物(2)	243	第231図	炭焼窯2	285
第181図	流出溝2-b出土製鉄関連遺物(3)	244	第232図	炭焼窯3	286
第182図	流出溝2-a出土製鉄関連遺物(1)	244	第233図	炭焼窯4	286
第183図	流出溝2-a出土製鉄関連遺物(2)	245	第234図	炭焼窯4出土須恵器	286
第184図	流出溝2-a出土製鉄関連遺物(3)	246	第235図	炭焼窯5	287
			第236図	炭焼窯6	288
			第237図	炭焼窯7	288
			第238図	炭焼窯8	288
			第239図	炭焼窯6・7・8位置図	288
			第240図	炭焼窯9	289
			第241図	炭焼窯10	290
			第242図	炭焼窯11・溝状遺構1平面図	291
			第243図	炭焼窯11・溝状遺構1断面図	292

第244図	炭焼窯12	293	第274図	窯2古段階出土杯・皿の技術的特徴	376
第245図	炭焼窯13	294	第275図	窯2古段階出土甕の拓影	378
第246図	炭焼窯15出土木炭	295	第276図	上淀廃寺出土の平安時代須恵器	379
第247図	炭焼窯14	296	第277図	茶畑六反田遺跡の平安時代須恵器	379
第248図	炭焼窯14出土須恵器・土師器	296	第278図	汗入郡内出土杯の法量比較	380
第249図	炭焼窯15(1)	297	第279図	山陰地方の古代須恵器窯の分布(8~9世紀)	381
第250図	炭焼窯15(2)	298	第280図	窯跡出土杯皿類の法量比較	385
第251図	炭焼窯16	299	第281図	古曾志平迫田3号窯出土杯・皿の法量分布	386
第252図	炭焼窯17	301	第282図	古曾志平迫田3号窯出土須恵器の特徴	387
第253図	炭焼窯18・溝状遺構2(1)	302	第283図	洪山池須恵器窯1出土の須恵器	388
第254図	炭焼窯18・溝状遺構2(2)	303	第284図	平瓦数量組成	395
第255図	炭焼窯19	304	第285図	上淀廃寺出土瓦	396
第256図	炭焼窯20	305	第286図	下市築地ノ峯東通第2遺跡の製鉄炉復元図	400
第257図	炭焼窯21	306	第287図	炉底塊62の工具痕・含鉄範囲図	401
第258図	炭焼窯22	306	第288図	伯耆国における鉄生産遺跡(古墳時代~平安時代)	404
第259図	炭焼窯23(1)	308	第289図	山陰地方における古代の製鉄炉	405
第260図	炭焼窯23(2)	309	第290図	遺跡周辺の製錬滓散布地	406
第261図	炭焼窯23(3)	310	第291図	伯耆地方における伏せ焼き大型炭焼窯	411
第262図	炭焼窯20・23出土瓦	312	第292図	出雲地方における伏せ焼き大型炭焼窯	412
第263図	2区遺構外出土須恵器・製鉄関連遺物	312	第293図	下市築地ノ峯東通第2遺跡の木炭・炭化材樹種別組成	413
第264図	石器製作工程模式図	356	第294図	鳥越山窯跡群と勝負谷製鉄遺跡	415
第265図	黒曜石製石核類の法量分布	358	第295図	窯跡出土の寺院関連遺物	418
第266図	黒曜石製剥片の法量分布	359	第296図	汗入郡における主要な古代遺跡	420
第267図	黒曜石製剥片の重量構成	360			
第268図	黒曜石製スクレイパーの法量分布	361			
第269図	名和飛田遺跡と西坪上高尾原遺跡の立地	363			
第270図	出雲地方の平安時代須恵器編年	365			
第271図	窯の構築順序と杯皿類の形態	366			
第272図	杯類の法量分布	374			
第273図	皿類の法量分布	375			

挿表目次

表1	遺構名新旧対照表		表17	堆積層)	48
表2	周辺古代遺跡一覧表	11	表18	頁岩・凝灰岩製石器等グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	49
表3	縄文土器組成	32	表19	頁岩・凝灰岩製石器等グリッド別出土点数(古代以降堆積層)	49
表4	縄文土器(早期末~前期初頭)グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	35	表20	礫石器グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	49
表5	縄文土器(早期末~前期初頭)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(1)	35	表21	礫石器グリッド別出土点数(古代以降堆積層)	49
表6	縄文土器(早期末~前期初頭)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(2)	36	表22	縄文土器観察表(1)	87
表7	縄文土器(中期以降)グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	36	表23	縄文土器観察表(2)	88
表8	縄文土器(中期以降)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)	36	表24	弥生土器観察表(1)	88
表9	石器器種組成(総点数・総重量)	41	表25	弥生土器観察表(2)	89
表10	安山岩製石器の外観的特徴による分類結果	42	表26	土師器観察表(1)	89
表11	石器器種組成(地区・石材別点数)	43	表27	土師器観察表(2)	90
表12	黒曜石製石器グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	46	表28	掲載石器計測表(1)	91
表13	黒曜石製石器グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(1)	47	表29	掲載石器計測表(2)	92
表14	黒曜石製石器グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(2)	48	表30	掲載石器計測表(3)	93
表15	安山岩・流紋岩製石器グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)	48	表31	掲載石器計測表(4)	93
表16	安山岩製石器グリッド別出土点数(古代以降堆積層)	48	表32	掲載石器計測表(5)	94
			表33	非掲載石器計測表(1)	95
			表34	非掲載石器計測表(2)	96
			表35	非掲載石器計測表(3)	97
			表36	非掲載石器計測表(4)	98
			表37	非掲載礫石器計測表	98

表37	須恵器・瓦の遺構別器種組成	106	表74	製鉄関連遺物観察表(7)	335
表38	瓦集計表	112	表75	製鉄関連遺物観察表(8)	336
表39	窯1出土須恵器・瓦の器種組成	115	表76	製鉄関連遺物観察表(9)	337
表40	窯2出土須恵器・瓦の器種組成	136	表77	製鉄関連遺物観察表(10)	338
表41	窯3出土須恵器の器種組成	167	表78	製鉄関連遺物観察表(11)	339
表42	灰原1出土須恵器・瓦の器種組成(1)	182	表79	製鉄関連遺物観察表(12)	340
表43	灰原1出土須恵器・瓦の器種組成(2)	183	表80	製鉄関連遺物観察表(13)	341
表44	灰原2出土須恵器・瓦の器種組成	184	表81	製鉄関連遺物観察表(14)	342
表45	灰原3出土須恵器・瓦の器種組成(1)	185	表82	製鉄関連遺物観察表(15)	343
表46	灰原3出土須恵器・瓦の器種組成(2)	186	表83	製鉄関連遺物観察表(16)	344
表47	須恵器の遺構間接合関係	191	表84	製鉄関連遺物観察表(17)	345
表48	製鉄関連遺物器種組成	224	表85	製鉄関連遺物観察表(18)	346
表49	製鉄関連遺物メタル度別重量比	224	表86	製鉄関連遺物観察表(19)	347
表50	製鉄関連遺物集計表	228	表87	製鉄関連遺物観察表(20)	348
表51	須恵器観察表(1)	313	表88	製鉄関連遺物観察表(21)	349
表52	須恵器観察表(2)	314	表89	製鉄関連遺物観察表(22)	350
表53	須恵器観察表(3)	315	表90	製鉄関連遺物観察表(23)	351
表54	須恵器観察表(4)	316	表91	製鉄関連遺物観察表(24)	352
表55	須恵器観察表(5)	317	表92	製鉄関連遺物観察表(25)	353
表56	須恵器観察表(6)	318	表93	製鉄関連遺物観察表(26)	354
表57	須恵器観察表(7)	319	表94	周辺遺跡の石器組成	357
表58	須恵器観察表(8)	320	表95	黒曜石製剥片・碎片の法量統計値	359
表59	須恵器観察表(9)	321	表96	小・中型品の製作手法	368
表60	須恵器観察表(10)	322	表97	出土破片数から推定した窯ごとの生産品目	370
表61	須恵器観察表(11)	323	表98	須恵器の重量と推定個体数	371
表62	須恵器観察表(12)	324	表99	杯皿類の法量統計値	373
表63	古代以降土師器観察表	325	表100	杯法量の計測値比率	374
表64	瓦観察表(1)	325	表101	山陰地方の須恵器窯の消長	382
表65	瓦観察表(2)	326	表102	窯の規模と生産品目	383
表66	瓦観察表(3)	327	表103	上淀廃寺の変遷案	399
表67	瓦観察表(4)	328	表104	下市築地ノ峯東通第2遺跡の主要要素一覧表1(まとめ表)	408
表68	製鉄関連遺物観察表(1)	329	表105	下市築地ノ峯東通第2遺跡の主要要素一覧表2(まとめ表)	409
表69	製鉄関連遺物観察表(2)	330	表106	伯耆・出雲における伏せ焼き大型炭焼窯一覧表	414
表70	製鉄関連遺物観察表(3)	331			
表71	製鉄関連遺物観察表(4)	332			
表72	製鉄関連遺物観察表(5)	333			
表73	製鉄関連遺物観察表(6)	334			

文中写真目次

写真1	製鉄関連遺物分類整理風景	224	写真6	a類糸切り痕の実験復元例	377
写真2	炭焼窯23煙道(東から)	311	写真7	b類糸切り痕の実験復元例	377
写真3	炭焼窯23煙道前壁スサ痕跡(東から)	311	写真8	平瓦凸面タタキ整形痕	394
写真4	壺底部破面の縞状構造	368	写真9	上淀廃寺出土平瓦・資料1	397
写表5	長頸壺頸部の接合痕	368	写真10	炉底塊②地点a	401

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本調査は、平成22年度に、一般国道9号中山名和道路の改築に伴い行った、西伯郡大山町下市地内に所在する下市築地ノ峯東通第2遺跡の発掘調査である。

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路の一部が自動車専用道路として供用されている。

このうち、大山町を通る中山名和道路の計画地内及び隣接地には、多くの周知の埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」)があり、建設に先立って計画地内の遺跡の有無並びに遺跡の範囲と内容を確認する必要性が生じた。このため、平成19年度から大山町教育委員会によって、国庫補助事業として逐次試掘、確認調査が行われた。

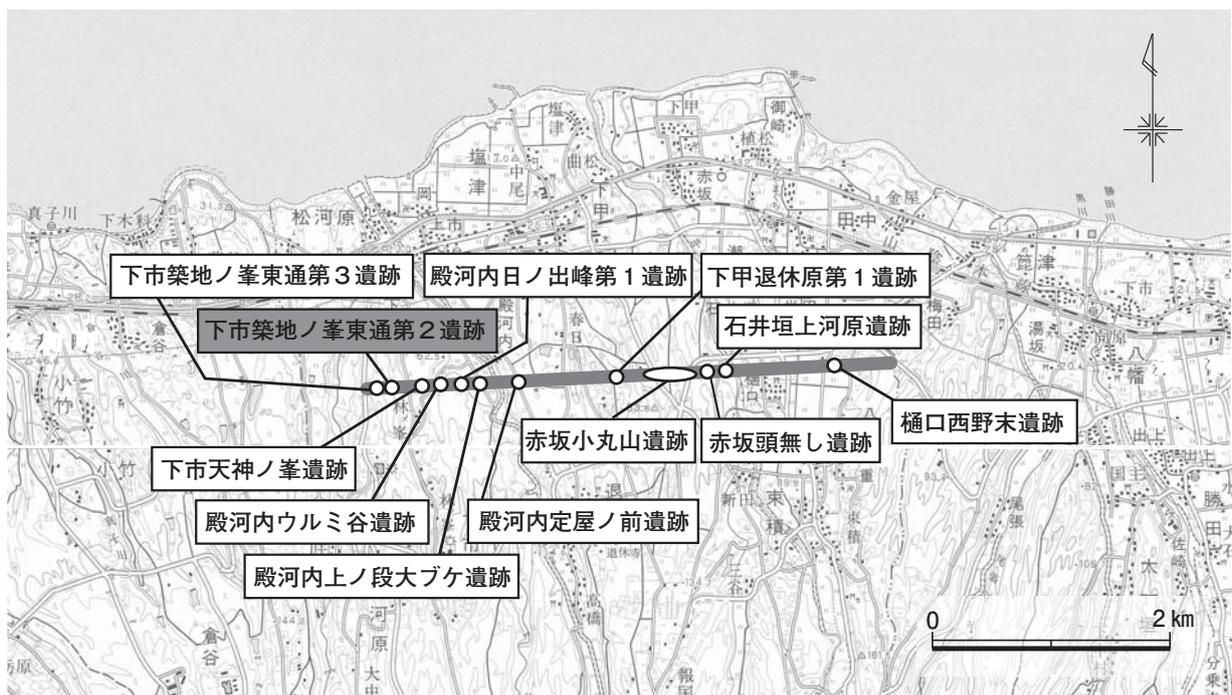
その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成21年度から鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、樋口西野末遺跡など2箇所の遺跡発掘調査を行い、各報告書が刊行された。

平成22年度は、殿河内定屋ノ前遺跡、下市築地ノ峯東通第2遺跡、下市築地ノ峯東通第3遺跡が本調査の対象となり、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過と方法

1 調査区の名称と調査方法(第2図)

下市築地ノ峯東通第2遺跡の調査前の状況は、山林である。調査に先立ち調査区を便宜的に1区と2区に分けた。1区は調査区東側の丘陵斜面下半から谷部にかけてであり、2区は調査区西側の丘陵尾根部から斜面上半にあたる。調査対象範囲の調査前地形測量を業者委託し、調査に取り掛かった。重機表土剥ぎ後、世界測地系国土座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定



第1図 中山名和道路関係遺跡位置図

第1章 調査の経緯

し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭名を採った。座標は、B5杭がX: -54280m・Y:-70610m、I16杭がX:-54320m・Y:-70750mなどとなった。標高値は、国土交通省3級基準点H19-3-10の67.282mを使用した。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる測量を行った。また、須恵器窯、製鉄炉については、三次元測量を行っている。現地での写真撮影及び遺物写真撮影は、35mm判、ブローニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。航空写真撮影については、6×6判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

2 発掘調査の経過

本遺跡の現地調査は平成22年4月5日に着手し、12月15日に完了した。調査は、まず、業者委託による調査前地形測量、及び調査前航空写真撮影から開始した。その後、4月12日から4月21日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行った。1区西側の丘陵斜面部は当初予定していた調査範囲外であったが、表土剥ぎにより斜面裾付近で灰原とみられる堆積層を確認し、須恵器片や瓦片が数多く包含することが明らかとなった。このことから、上方の斜面地に窯跡など遺構が存在することが予想されたため、4月19日に国土交通省、鳥取県教育委員会文化財課と現地協議を持ち、調査地として斜面部が追加されることとなった。

発掘作業員の稼働は4月28日に開始し、12月15日まで遺構検出、及び掘り下げ作業を行った。追加範囲の調査は6月1日に着手し、人力による表土剥ぎを行った後、包含層掘り下げ及び遺構の検出作業に取りかかった。しかし、急斜面地での調査は安全確保のため基本的に雨天時の作業を中止せざるをえず、開始時期も梅雨の時期と重なったこともあり、予想された窯跡を検出するのに1ヶ月半程度を費やした。さらに、8月中旬には斜面中腹において須恵器窯と同時期とみられる製鉄炉を確認し、排滓場からは膨大な量の製鉄関連遺物が出土するに至った。とくに、排滓場2は製鉄関連遺物の包含密度が高く、湧水が著しいために壁面の崩落などを引き起こすなど掘り下げ作業は難航した。古代の遺構調査が進捗した11月6日には航空写真撮影を行うとともに、須恵器窯や製鉄炉に関しては三次元



第2図 調査地位置図

測量を11月10日から実施した。11月11日には記者公開、11月13日には、一般の方を対象とした現地説明会を午前と午後の2回に分けて開催し、県内外から合わせて160名の方々に参加いただいた。現地説明会以後、2区の縄文時代包含層や1区谷部の自然流路など下層の調査を行い、12月15日に全発掘作業を終了した。

発掘調査の結果、縄文時代の土坑3基、自然流路1条、古代の須恵器窯3基、灰原3箇所、製鉄炉1基、排滓場2箇所、瓦溜まり2箇所、炭焼窯18基、自然流路1条、近世の炭焼窯5基などを確認した。とりわけ、平安時代では窯業と製鉄業を同時期に複合して行う生産遺跡であることが判明し、古代における物資の生産や流通を考えるうえで重要な知見を得ることができた。調査面積は当初、6,381㎡であったが、1区西側斜面部が追加されたため、7,566㎡に変更となった。

なお、現地調査にあたっては、赤木三郎氏、穴澤義功氏、木立雅朗氏、白石純氏、丹羽野裕氏(五十音順)の各氏に、適宜調査指導をいただき、その指導内容を取り入れながら調査を進めた。

第3節 遺物整理作業の経過と方法

1 整理作業の経過と方法

平成22(2010)年度

整理作業は、発掘調査と並行して出土遺物の洗浄・注記を行うことから開始し、調査の中盤ごろからは、出土量が比較的少ない、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器の実測に取り掛かった。発掘調査終了後、穴澤義功氏に指導を仰ぎ、製鉄関連遺物の本格的な分類整理を開始した。

製鉄関連遺物の分類整理は鉄生産の実態に迫ることを目的とし、出土した全点を対象に行った。分類整理の方法は第5章4節で詳述するが、まず、粗分類、詳細分類を行ったうえで1点ずつ個票を付け、メタル度、磁着度、重量等を計測した。その後、報告書掲載遺物を抽出し、その中から金属学的分析資料を選定し、分析資料詳細観察カードを作成するなど金属学的分析の準備を進めた。

また、かなりの出土数をみた、縄文時代を中心とした石器も、次年度の整理作業量等を把握する必要があったため、平成22年度に器種分類とその集計を行った。

平成23(2011)年度

須恵器、瓦、石器の本格的な整理作業と、報告書の作成に係る製図作業などを行った。また、製鉄関連遺物については金属学分析委託業務、金属学的分析資料以外の詳細観察、金属学分析結果を踏まえた総合的な遺構、遺物の評価を行った。

出土遺物の大半を占める窯跡関連の須恵器は、接合・器種分類作業から取り掛かり、約2ヶ月をこの作業に費やした。分類作業は、後述する基準に基づいて整理作業員が行い、その分類結果を調査担当職員が再確認しながら行った。分類後、破片数をすべてカウントし、取上番号、器種毎の点数を記録していった。それをもとに、遺構毎、層位毎の器種別点数を集計している。こうした作業には、多大な時間と労力が費やされたが、本遺跡での須恵器生産の様相を把握するための基礎的なデータとして重要なものと考えている。分類作業後、実測対象遺物を約400点抽出し、実測を開始した。また、実測作業と並行して、胎土分析試料の抽出、採取を行った。

瓦の整理も、須恵器と同じく接合と分類作業から開始し、これに約1ヶ月を費やした。分類は全点を対象に実施することとし、平瓦、丸瓦が大部分を占めていることから、種別、凸面整形・調整、凹面布目、側面調整、端面調整、胎土、焼成、隅数の観察結果を記入した個票を1点ずつ付けた。なお、

分類は須恵器と同じく、整理作業員が行った分類結果を調査担当職員がチェックしながら進めた。その後、分類結果をもとに実測遺物を約200点抽出し、実測を行った。また、これと並行して、胎土分析試料の抽出、採取を行った。

石器の実測作業は古代の遺物の実測が終了してから取り掛かった。本遺跡の中心となる古代の遺物が膨大であったため、石器実測に費やせる時間は限られており、実測点数はある程度絞り込まざるを得なかった。それでも約250点が実測対象となり、実測には約3ヶ月の期間を費やすことになった。また、実測作業と並行して、実測対象とならなかった石器の計測も行った。

遺物の実測終了後、実測図のトレースを順次行い、トレース終了後、図版版下を作成した。

2 須恵器の分類方法

須恵器は、先述のように全点器種分類を行い、各器種の点数をすべてカウントしている。器種分類とカウントの方法について記載しておく。

器種分類は、確実な器種判定ができないものについても、「杯類または皿類」などといったカテゴリーを設けて行っている。なお、実際の分類に際しては、分類番号を用いており、保管遺物もこの番号毎に整理している。以下に、分類の基準と分類番号を記載する。

- ①：突帯付高台杯。体部に突帯が巡る高台杯。杯類の破片のなかで、突帯を貼り付けた体部片がこの分類に当てはまる。ただし、実際には後述する③・⑥・⑧にも、突帯のない部分の破片が含まれると思われる。
- ②：高台杯。口縁から底部までが残る杯類の破片で、底部に高台が付き、かつ突帯がないもの。
- ③：①または②の高台杯。底部付近の杯類の破片で、高台があるもの。
- ④：杯。口縁から底部までが残る杯類の破片で、高台が無いもの。
- ⑤：皿。口縁から底部までが残る破片で、高台がないもの。④とは立ち上がり角度で識別している。
- ⑥：杯類。突帯付高台杯または高台杯または杯。口縁部から体部片で、杯類と判断できるが、①～④に分類できないもの。
- ⑦：皿類。口縁部から体部破片で、皿と判断できるもの。
- ⑧：杯類または皿類。口縁から体部片で、杯類と皿類どちらか判断できないもの。
- ⑨：突帯付長頸壺。頸部を含む破片で、長頸壺と分かり、かつ頸部に突帯があるもの。
- ⑩：長頸壺。頸部を含む破片で、長頸壺と分かり、かつ頸部に突帯が無いもの。
- ⑪：壺類。体部から底部片。杯皿類より大型かつ厚手の破片で、タタキ・当て具痕が見られないもので、底部片の場合は高台の無いもの。長頸壺以外に、短頸壺などの各種壺類の体部も含まれている可能性が高い。さらには、鉢の体部や底部も含まれている可能性もある。
- ⑫：突帯付きの瓶類。胴部にタタキや当て具痕があり、甕に比べて器壁がかなり薄いもののうち、外面に突帯が付くもの。この分類には口縁を含む破片がなく、瓶類としたが、実際には器種不明。
- ⑬：瓶類。胴部がほぼ全形残っており、突帯が無いことが確実な瓶類。胴部にはタタキや当て具痕があり、甕に比べて器壁がかなり薄い。実際には器形が復元できた個体は横瓶1点のみであった。
- ⑭：瓶類。⑫・⑬以外の、タタキや当て具痕のある薄手の破片をまとめた。胴部片が大半で、基本的には⑬と同じく横瓶が主体となろう。口縁部片も横瓶と思われるものが多い。ただし、壺や小型の甕に近い器形に復元できそうな口縁から頸部片も存在する。

- ⑮：甕。甕は大きさに大小があるがすべて1分類にまとめた。口縁部片は外に大きく開くもの、胴部片の場合はタタキ・当て具痕があるもののうち、厚手のものである。
- ⑯：甕または瓶類。胴部にタタキ・当て具痕がある破片のうち、⑭か⑮か判断できなかったもの。
- ⑰：須恵器転用焼台。二次焼成を受けて還元状態になった須恵器のうち、他の須恵器の熔着が見られるものや、積み痕が見られるもの、破面に自然釉がかかっているものなど、焼台として使った可能性が非常に高いもの。実際には、この分類以外にも焼台は存在すると思われる。
- ⑱：その他。①～⑰以外の少量器種はすべて⑱として分類した後、再度器種分類した。その結果、高台皿、鉢、鉄鉢形、蓋、短頸壺、硯、平瓶などが確認できた。

以上の分類を出土須恵器全点に対して行い、取上番号毎に分類した破片の数をカウントした。破片数のカウントにあたっては、破片の大小にかかわらず全て1点として数えている。また、接合したものについては、接合した状態で1点として数えた。したがって、数字の上では完形品も1cm四方ほどしかない細片も同じく1点として数えており、その数の示す内容は均質ではない。このような問題を認識しながらも、作業量が大きく増えることから、破片のサイズ毎にカウントするなどの方法はとらなかった。また、甕のような大型品と杯皿のような小型品では、破片化の確率と個体あたりの平均破片数は大きく異なるであろうから、直接その量的な比率を比較することはできない。こうした問題点は、重量から個体数を推定する方法(第6章第2節参照)でカバーできると判断し、口縁や底部の残存率を詳細に記録するといった個体数を割り出すための方法は時間的な制約もあって採用しなかった。

調査日誌抄

4月5日	調査前地形測量。	
4月8日	調査前航空写真撮影。	8月31日
4月12日	重機による表土剥ぎ作業開始(～21日)。	9月17日
4月15日	1区西側表土剥ぎ中に須恵器、瓦が数多く出土。灰原らしき堆積を確認。	9月21日
4月16日	林道路面及び法面で窯跡1基(窯1)を発見。	9月30日
4月19日	国土交通省、県文化財課と調査区外にあたる1区西側斜面の取り扱いについて協議。	10月5日
4月28日	発掘作業員事前説明会 発掘作業開始。	10月7日
5月7日	2区丘陵頂部から本格的に掘り下げ作業開始。	10月8日
5月18日	炭焼窯23検出状況写真撮影。	10月15日
5月27日	1区追加調査範囲調査前地形測量。	10月19日
5月28日	1区谷部の堆積状況を把握するためのトレンチを掘削。	10月26日
6月3日	1区追加調査範囲調査前現況写真撮影。	11月4日
6月21日	1区西側斜面追加調査範囲人力による表土剥ぎ開始。	11月5日
6月25日	炭焼窯15検出写真撮影。	11月8日
7月7日	窯2を確認。排滓場1付近の表土中から製鉄関連遺物が集中して出土。	11月10日
7月8日	窯3を確認。	11月11日
7月21日	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター丹羽野裕氏第1回調査指導。	11月13日
7月28日	1区西側斜面に落石防止用ネット設置。	11月17日
8月2日	1区西側斜面表土剥ぎ終了。	11月18日
8月10日	1区西側斜面中腹の調査区際の特レンチで製鉄炉を確認。排滓場2掘り下げ開始。	11月24日
8月18日	窯1～3、灰原1～3に先行トレンチを設定し、掘り下げ開始。	11月29日
8月23日	1区北西側調査区出入口部分重機による表土剥ぎ(～24日)。	12月1日
8月26日	2区瓦溜まり周辺瓦集中出土状況写真撮影。	12月3日
8月30日	灰原1～3に小グリッドを設定し、本格的な掘り下げを開始。	12月10日
		12月13日
		12月15日

第1章 調査の経緯

第4節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成22年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長	久保 穰二郎
次長	中尾 淳一(兼総務係長)
総務係	
副主幹	福島 良
主事	楠原 真衣
事務職員	大丸 真紀、岡村 好美

発掘事業室

室長	山柁 雅美(兼調整係長)
調整係	
発掘調査員	岩垣 命
事務職員	太田垣 聡美(4月～5月)、高橋 恵美子(6月～10月)

調査担当(琴浦調査事務所)

副主幹	牧本 哲雄(統括責任者)
文化財主事	森本 倫弘(調査担当責任者)、北 浩明(調査担当責任者)
	濱本 利幸、長尾 かおり、坂本 嘉和
発掘調査員	野津 旭
事務職員	山根 美穂

平成23年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長	久保 穰二郎
次長	中尾 淳一(兼総務係長)
総務係	
副主幹	白岩 準市
主事	楠原 真衣
事務職員	大丸 真紀、岡村 好美

発掘事業室

室長	山柁 雅美(兼調整係長)
調整係	
発掘調査員	岩垣 命
事務職員	倉益 知子

調査担当(大山調査事務所)

副主幹	牧本 哲雄(統括責任者兼調査担当責任者)
文化財主事	濱本 利幸、北 浩明、長尾 かおり、坂本 嘉和
事務職員	尾崎 勇真(4月～6月)、犬塚 義人(8月～平成24年3月)、小塩 真生